

先月号で調査隊は、ホスピスで余命宣告を受けた人たちの姿を通して、限られた時間を有意義に生きるこの大切さを学びました。しかし、さらに調査を進める中で、多くの人は死（終わり）を意識しておらず、「生きた屍」になっていくことが多いことも分かりました。

広井学 ● やっぱり、いつか終わりが来るのって認めづらいんだね。意



外と今が良ければそれでいいと思っている人って多いみたい。結局は、それが周りの迷惑になることが分からないんだね。

有賀冬子 ● 本当よね。でも、実はその点に関しては、自分もあまり大きな声では言えなかったりしてね。

広井 ● えっ……、うーん……良く考えてみたら、思い当たる所があるかもしれない……。

白辺隊長 ● 結局、独りよがりの気持ちが湧いてしまうのは、様々な支えがあって自分が生かされていることに気づけないからかもしれないね。

広井 ● 確かに生かされているという感覚ってあまり意識しないもんね。

有賀 ● そのために、まずは自分を知ることから学ぶ必要があると思うけどね。

隊長 ● では、いい機会だから、自分という存在について、詳しく調査してみよう。



今月号では限られた時間を有意義に生きるために死の稽古の具体例を紹介します。



**み教え調査隊とは**  
いつも耳にするけど、実はよく分からない——そんな「解脱用語」を調査し、教えの理解を深めるべく秘密裏に結成された特別調査チーム。毎回金剛さまの遺されたご指導を読み解き、時に取材に繰り出して、調査した結果を誌面にて報告する。

特集 **み教え調査隊**

- 隊長 白辺 史郎
- 隊員 広井 学
- 隊員 有賀 冬子
- 特別隊員 ニャン太

# 自分とくらしの存在を考えたよ！

## ① 生かされている自分

金剛さまは、『真行』において、「人は神によって生かされている。神の分身霊である」と示され、また続けて「肉体が宇宙現象のまにまに生きている如く、精神も亦神のまにまに生きなければならぬ。茲に瞬時も神と離れることの出来ない本則がある。故に神を意識し、神に通じ神慮のまにまに生きんとする神人世活は最も自然の道であり、人間生活の根本道である」(『真行』7〜8頁)と示されています。

大自然の中で生かされている私たちは、大自然の法則から逃れ自分勝手に生きることができません。

例えば、私たちの心臓は意思とは関係なく動き、血液を巡らせ、生命を維持しています。一方、いくら歳

を取りたくないと思っても月日は流れていき、誰のもとにも老化は訪れ、いずれ死を迎えます。

金剛さまは「神様とは宇宙大自然のことだ」(『恩愛の絆』74頁)ともおっしゃられています。その大自然の中で生きている私たちは「神より命を与えられて生かされている存在」なのです。

## ② 与えられた役目を知る

「神意を如実に具現すべき特殊使命をもつのが人類である」(『真行』11頁)とあるように、金剛さまは神のご意思に沿って生きることが人間として最も好ましい生き方と示されています。

この神から与えられた使命とはどのようなものかと言えば、それは「解脱世界の表現」です。具体的に言え



ば、それは共存共栄を目指して生きること、互いに思いやり、助け合い「よりよい世の中をつくれ」ということです。そしてそれは、自他の幸福を願う生き方です。

私たち一人ひとり、その神意に沿って生き、よりよい世の中をつかっていく役目が与えられているのです。これが人として生きていく根本の大きな目的です。

もう一つ、すべての命は神の賜物

ですが、今の自分をご先祖さまが

代々命をつないできてくれたことで存在している命です。先祖代々続く命の連鎖の先端に自分が立っているという認識をもつことが大切です。

この認識に立つ時、大先祖から祖父母、両親そして自分にまでつないでいただいた命を今度は自分から子や孫につなげていく役目があることが分かります。今を生きる私たちには、このような大切な役目が与えら

れています。

さらに私たちのご先祖さまは、ただ命の継承をしてきただけではなく、それぞれの代の中で「わが家が栄えていくために」と、夫なら夫、妻なら妻のそれぞれの立場でご努力を重ねてきてくださったはずであり、その「役目を果たす努力」がその家を支えてきたのです。

自分の人生は自分が主人公であり、どのような人生を歩むかは自分次第ですが、神より命を与えられ生かされている自分、ご先祖さまより命をつないできていただいている存在している自分という、これらのお蔭を知った時にどのような生き方を選択していくべきなのが見えてくるのではないのでしょうか。

数々のお蔭を知り神意に沿って生きる時、そこにあるのは自我を優先する生き方ではありません。「自分のやりたいことを後にして、他の(全

体)良くなることを中心にした生き方」をしていくことであり、自分の与えられた役目に対して「自分の精いっぱい」のことをしていく努力をする生き方です。

このように、神のご意思に沿って生き、努力を重ねるところに自然の恵みが与えられるものなのです。

## ③ 自分の命を生かすために

私たち人間は、社会的動物と言われるように、知らず知らずのうちに社会の中でお互いに支え合って生きています。

「呼吸一つさえ他人と同じ空気を吸ったり、また吐きつつ、而も共存に無関心で独り栄えようとは、大きな間違いです」(『ご聖訓』第六巻55頁)との金剛さまのお言葉のとおり、周りのことを考えず自分の幸せのみを考へて生きようとしても、上手くいかないのがこの世の中です。



# 死の稽古のススメ

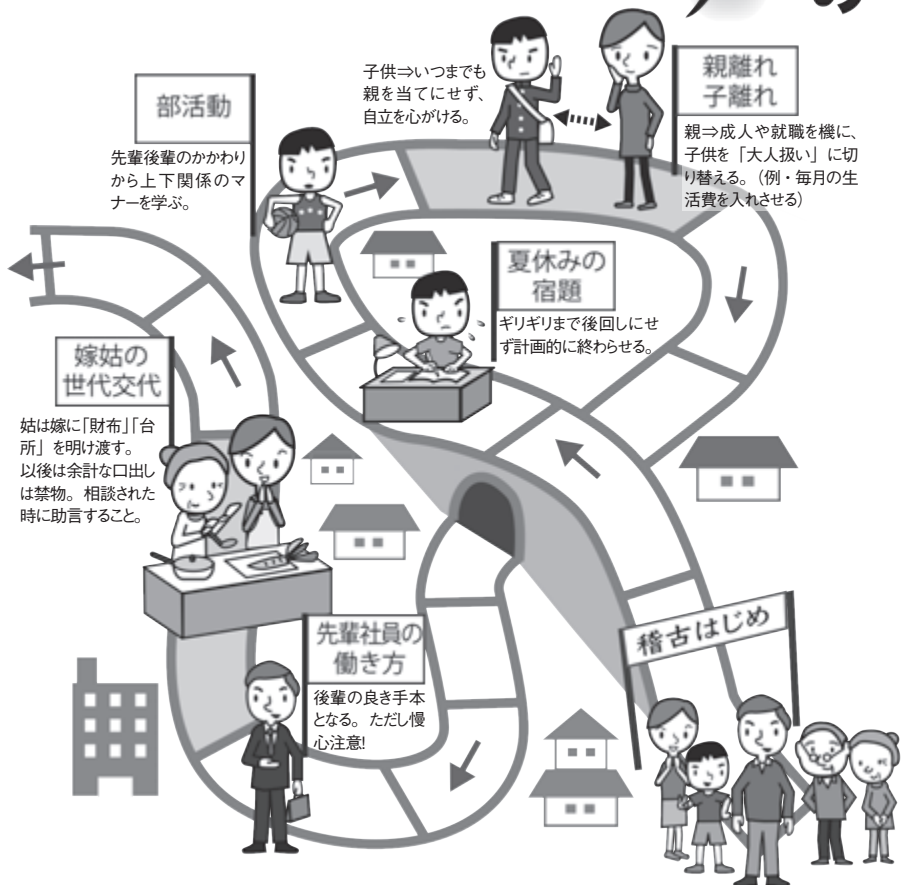
**有賀** ● 死の稽古の実践例をすぐろく形式でまとめてみたわ。

**広井** ● へく子供や大人に関わらず、誰でも死の稽古は実践できるんだ。

**有賀** ● 年を経ながら取り組む内容は移り変わっていくのね。その時期にしかできない課題を認識して乗り越えていくたび、一回り大きな新しい自分になって再出発できるの。

**広井** ● 何だか「脱皮」みたい。常に新しい自分になれるなんてイイね。

**隊長** ● そのためには先を見据える目と現状認識だね。仕事面だと『50代からの選択』（大前研一著・集英社）には五十代からは退職までの残り時間を意識して、①会社に感謝を持つ、



家庭の中で自分は何を果たすべきかを自覚することは大切ですが、「社会のつながり」の中でも自分の役割に気づくことは大切です。

例えば、代々農業を営んでいたら、先祖から受け継いだ農地で作物を作り、また次の代に引き渡すことが今を担っている人の役目になります。

それは会社であっても同様です。例えば会社は、自分は辞めても社会に役立つ限り存在し存続していくものですから、いずれ自分がいなくなった時のことを頭に置き、「会社のために今自分ができることは」という考え方が大切です。

具体的には、会社の利益になることを考え、自分の立場で精いっぱい努力し、そして自分が退いた後も会社が発展するように、後輩や部下を一人前に仕事ができるように導いていくことです。



このような考えが頭に行かない人は、どうしても自己中心な行いに走り、自分の立場を守るため後輩に仕事を教えない先輩や、雑用ばかりを押し付け消耗品のように扱っ上司といった、周囲の者や会社自体に迷惑な人間になってしまいます。そしてこのような人は、会社の将来をも危うくする人であり、まさに生きながら死んでいると金剛さまがおっしゃられた「生きた屍」です。

家庭の中や社会の中でも、常に自分を俯瞰して見る目を養うことが大切で、自分という立場を考えてそこで何を果たすべきかを認識することです。そして自分の利益よりも全体の利益を優先し、後に続く人のためを考えて行動することが、「死の稽古」です。

この稽古を行う人は、神先祖に喜ばれる人となり、社会からも必要とされ「あなたがいてくれてよかった」と喜ばれる人となっていくでしょう。

以上のことを踏まえ考えてみると、自分の命を生かしていくということは、「他のために自分を使っていくこと」なのではないでしょうか。

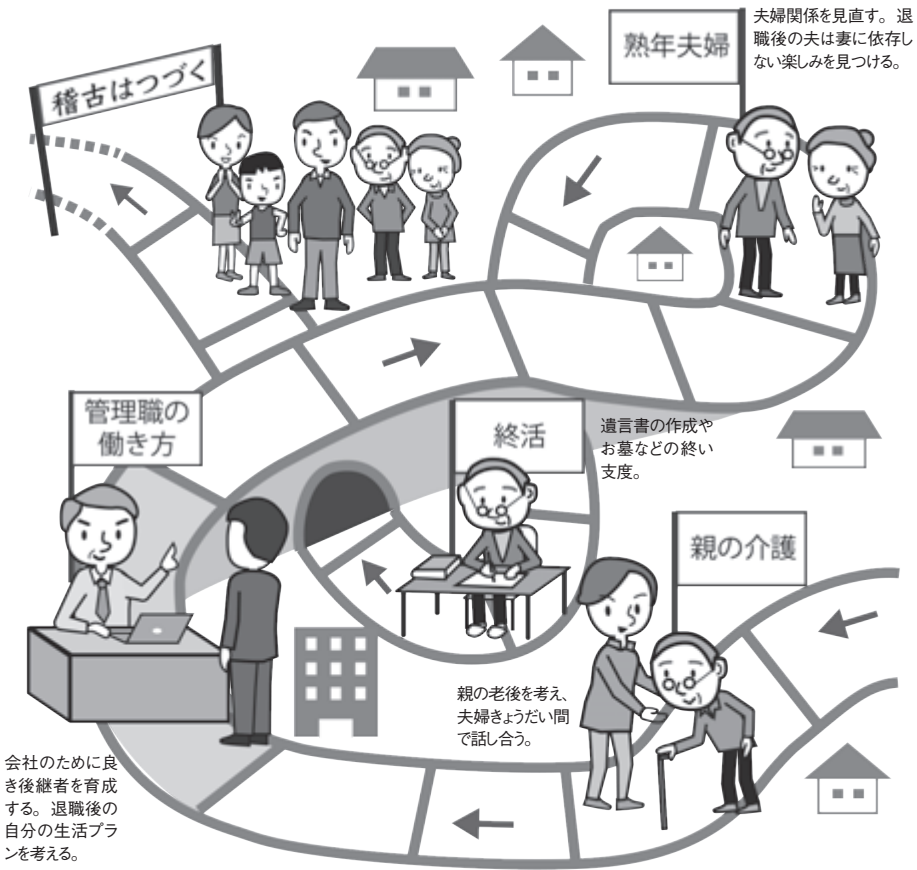
しかし、死の稽古とはそれぞれの立場によっても変わっていくため、実際にどうやっていけばよいのか分からないものです。そこで、次のページではそれぞれの立場における死の稽古を考えていきます。

「常に今日を最後として事に当り、かつて為すべき明日の課題を空しく机の塵に埋めたことはない。かかる心境を以て生涯となす」(『三聖訓』第四巻44頁)と申された金剛さまのご口常は、まさに死の稽古でした。例えば、昭和十五年頃のことです。金剛さまから、立派な杉の板五枚を、金だわしで木目が浮くまで磨くことを命じられた修行生が、作業に何日もかかるため、道具を出したままにしておいたそうです。ある日、その様子をご覧になった金剛さまは、「なんだ、このごまはー」と一喝され、「二日の仕事終わりににはきちんと呼付け、また始める時に準備をするのだ。そんな心掛けではいくら板を磨いても何の価値も無い」と厳しく指

導されました。金剛さまご自身も、出講などでお帰りがどんなに遅くなっても、その日に来た手紙の返事はその日のうちに書かれたといひます。また、根本行事の一つである三聖地巡拝においては、初の団体参拝となる第二回において、ご自身で泉涌寺の塔頭に宿泊するという難問題を解決され、手配の一切を整えられた上で、実際の行程は指導員にすべて託されています。これは後継者の育成と、巡拝を永久に続けていくためであり、「我なき後」を考えられていることでした。昭和二十一年頃からは、身体が衰弱される中、「会長の一日の生命が百人の会員に生かれば本望である」と申され、会員が自ら気づけるように、時には厳しく叱りつけ、時には優しく個人指導を続けられました。そして晩年は、病床の中、医師に面

会謝絶と言われても、訪ねてくる会員には必ず対面し、ご指導されたこと伝えられています。さらには数々のご講演を通して、会員が歩むべき道筋を遺言のように伝えられ、特に三建碑については毎日のように触れられ、「三建碑に額すき、ひざまずき、真心で念じればいかなることも教える。靈魂は不滅だ」(『新版解脱金剛伝』第二巻524頁)と、死後も会員を指導すると約束されたのでした。「一切のことは言い尽くし、書くことは書き残した」とのお言葉を遺され、ご遷化された後は解脱金剛宝塔に鎮まられ、宝塔内に斎祀された多くの靈魂と共に、現在もこの国のため、社会のために働いておられます。靈界において今も働いておられる金剛さまのお姿は、「死の稽古」の模範であり、私たちが見習うべき手本です。

## 金剛さまの お姿に学ぶ



②仕事の棚卸をする、③縁の下の力持ちに徹して、役立つ人材を育てるなど、会社の資産として自分が遺せるものを考えることが大切であるよ。広井●遺せるものを考える姿勢か。親として子供の幸せを本当に願うなら、するする面倒を見続けるより、自力で生きていけるよう、時には突き放すことも親の死の稽古なんだね。有賀●でも荷卸し症候群が心配だわ。子育てを終えたり、退職した途端にがっかりきちゃっ人多いもの。広井●次の役目を探すなんてどう？ 老後は趣味に時間を費やすのもいいけど、自分を活かせる場所を地域や解脱会の支部で見つけていくのも素敵な生き方の選択だと思っな。隊長●何にせよ、僕らが人生のステップを進んでいくには、小さな自分に執着せず自我を断ち切る「死の稽古」が必要なんだね。それぞれ今の自分の課題は何か考えていこう！